「こどもテレホン相談」から(2)

# 子育て、ひとりで背負わなくてもいいんだよ

小島　直美

「こどもテレホン相談」にかかってくる相談の中から今回は乳幼児期のことを考えてみたいと思います。

初めての育児での不安を訴えてくる母親の相談がほとんどですが、子育て中の母親自身の人間関係の悩みや人生への悩みも語られます。育児は育自とも言われるように、子どもを生み育てていく過程で母親は何度か自分の価値観や生き方に向きあわされます。我が子とつきあっていく日々に自分の育てられた日々が重ねられ、もう一度自分を生きなおすとき、それをお手伝いするのが電話相談員の仕事です。

つぎに、そのいくつかの例を挙げてみました。

## 新米ママには先輩としてアドバイス

初めての妊娠は、母になる喜び、期待、責任、そ

して不安もいっぱいで、出産までの毎日を様々な思いで過ごします。

かびとり剤を使ってしまったが大丈夫か、肩こりの低周波治療は胎児に影響ないか、温泉は？　飛行機は？　ストパー（ストレートパーマ）をかけたい、子宮底が低いと言われて心配。

病院の健診でお医者様とゆっくり話せていないのかな、近くに相談できる先輩ママやおばあちゃんがいないのかな、と不安気な妊婦の声を聞きながら思います。

そして出産、黄疸が消えない、シャックリがとまらない、目やにがでる、便が二日も出ない、フラッシュをたいて写真を撮ってしまったが、心配ないか、等々、いろいろな不安が訴えられます。

最近は実家に帰らず、若い両親がスタートから子育てを共働する姿が受話器の向こうに微笑ましく浮かんできます。一方、昼間はひとりで奮闘している母親も多くいます。私はそんな新米パパやママに、昔で言えば同居のおばあちゃん、近所のちょっとおせっかいなおばさんのように育児のヒントを伝えてあげられたらと思っています（もちろん相談者に信頼される関係作りが前提ですが）。赤ちゃんを育てている母親や父親がいろいろな意味で守られ支えられてこそ、赤ちゃんの健やかな成長が保障されると信じます。ちなみに、私も一時は専業主婦で三人の子育てを経験しました。現在長男は二十二歳、そろそろ〝おばあちゃん年齢〟です。子育て相談は自分の失敗談が多い分、私の得意分野と自負しているのですが……。

## 子育て、ひとりで背負わなくてもいいんだよ

**生後三か月の女児の母親から**　子どもをかわいがれない。毎日、きょうこそは殺しちゃおうかと思う。家を出たい、夫とも別れたい、孤児院に預けられる

か、そばで火のついたように泣き叫ぶ赤ちゃんの声がしている中での通話。せっぱつまったものを感じながら、まず母親の話を傾聴する。赤ちゃんを生む前までは、いいお母さんになろう、赤ちゃんをかわいがろう、赤ちゃんを死なせて捨てた親のニュースを聞き、何でそんなことをするのだろうと思っていた。この子は手がかかる。よく泣く。ミルクを飲まない。夜も一時間おきに起こす。このまま泣き続けて死んでくれればいい。直接手を下したことにはならないから。三か月で自分の心がこんなに変わってしまうなんて。

産後実家に帰ったが実母に歓迎されなかった。赤ん坊が泣くとうるさいと言われ気がねがあった。母乳は出ず、子宮の回復も遅くつらかった。二週間も居ないで自分のマンションに帰った。三か月になれば楽になると言われていたのにどんどん難しくなる。夫の協力も得られずひとりで大変な思いをし、とうとう限界に達した状況の訴えが続く。〝本当に大変だったね、つらかったね〟、と母親の気持を受けとめて話を聴いていくうちに母親の声のトーンが穏やかになってくる。三十分たつ頃、赤ちゃんも泣きやみ、母親の声がやわらかくなってくる。

この訴えの背景に、母親自身が実母にかわいがられず育ったこと、母親の実母と祖母の嫁姑争いが長かったこと、父親も実父母を幼少時に亡くし養父母に育てられたこと、父親の養父母と母親の実家との折りあいが悪く結婚式もあげずにやっかいばらいされたように結婚したこと等、夫婦それぞれに家族の大変さを乗り越えてこの赤ちゃんの親になったことが語られた。一方夫には未熟な面があり、母親としての妻を支えきれない。しかし自分の生い立ちからこの子には寂しい思いをさせたくないととてもかわいがっていることもわかる。

電話口で赤ちゃんの甘える声がしはじめ、母親が

それに甘くやさしい声で応える。〝本当はかわいい赤ちゃんだよね、ただ大変なことが重なって疲れちゃったのね、ひとりだけでがんばらないで皆に助けてもらっていいんだよ〟。保健所の三か月健診も近く、赤ちゃんがかかっている小児科の医師が母親を小さい時から診てくれていたことも安心と思われた。

本当に電話して良かった、と涙声で言ってくれた母親、七十分の電話でのつながりがきっと力になってくれたことを信じて受話器を置く。

日本でも最近児童虐待という言葉がよく聞かれるようになりました。以上の相談のように子どもがかわいく思えない、さらに虐待寸前です、今子どもを叱りつけて玄関から放り出してしまった、との訴えが電話相談にも増えてきました。赤ちゃんが育てにくい気質を持って生まれた場合、母親は本当に大変です。その母親を支える人がいることの大切さ、そして母親自身がしっかり愛された記憶を持てていることが子育てにとても大切だと痛感します。

## たまにはお母さん自身の時間を持って

**三歳三か月の男児の母親から**　結婚して十年仕事を続けてから出産。子どもの要求につきあうのが大

変。つい〝ひとりで遊んで〟という思いで拒否してしまう。自分のペースがくずれてくると〝あんたのせいよ〟と当ってしまう。母親になる以前は縛られた経験はなかった。おとな同士のつきあいは相手の様子を見ながらのやりとりが普通なのに、子どもはこちらのことはおかまいなしにあれこれ言ってくる。私の言い分からすれば〝気にいらないこと〟の繰り返しが育児。夫は仕事が忙しく育児の手助けは期待できない。でも子どもとは週一度休日のみのつきあいだから何もかも許せる。かえって母親の叱り方が悪いと責める。

他人はそんなに大変なら保育園に預けて働けば、と言う。そう言われると逆に自分は今まで本当の意味で子どもをかわいがってきただろうか、と子どもを手放すことも不安になる。

責任感もあり、保育園に預けて自分が働くことの後ろめたさもあり、母子の悪循環をはらんだ密着がますます強まっていきそうです。この息子さんは最近テレビでけんかや争い事や親が子どもを叱る場面を見るのを嫌がるようになったとのこと。このままじゃいけないと強く思ったという母親の気づきを受けとめ、三年保育に向けての週二日のならし保育に行き始めたそうなので、〝そんな時は母親の、自分自身の時間として息抜きし、帰ってきたら笑顔で迎えられる余裕が持てるといいね〟と今できそうな事をアドバイスしました。今度イライラしたら小島さんがいてくれることを思い出します、と終わることができました。その後も時々電話があります。幼稚園に入園してお友だちもでき、元気に通園しています。

女性も男性と同じように能力を発揮して社会で活躍するようになりました。ところが〝母親〟になって仕事をやめ子育てに専念すると、納得したはずな

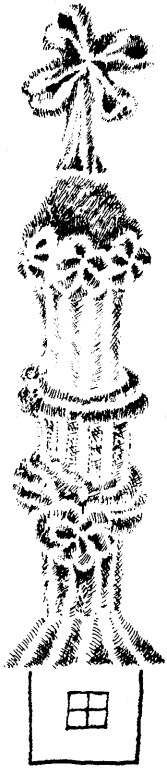
のに束縛感、不自由感に苦しめられる人もいるようです。自分自身の自己実現と母親であることを上手に折りあわせていくこともこれからの女性の課題のひとつだと思われます。

## 子育ての仲間ができると安心

母親が子どもを連れて外で遊ばせる頃の出来事もたくさんの訴えになって寄せられます。

公園に言っても親から離れられずに遊べない。他の子のおもちゃを取っちゃう、乱暴、逆にすぐ譲っちゃう。子どもはこれらの経験を経て友だちづきあいを学んでいくものです。母親たちが自分の子どもだけでなくどの子も同じに成長を見守っていけば特に問題はありません。ところが母親同士が良い友だち関係を持てないことがあまりに多い気がします。

**二歳半の男児の母親から**　おとなしいひとりっ子、公園に遊びに行くとぶたれたりつねられたりする。



おもちゃの取りあいとかでなく、本児そのものが暴力のターゲットになってしまう。相手は三歳の男児、下の子が生まれたこともあるがそれ以前から母親は公園には出てこない。この子の乱暴には他の母親たちもとても困っている。しかし本児ひとりがターゲットになってくると、皆我が子さえよければという態度がみえみえで、皆で解決していこうという気はない。むしろ「めそめそしてるからやられるのよォ」と言う。母親も地域の中で自分ひとりが浮いたら大変と、つい「あんたが弱々しいから……」と子どもを責めてしまった。今話していてまわりの母親たちの中で自分を見失っていたのに気づく。我が子の良い面を認めてあげてこの子が安心して遊べる友だちを探してみたい。

「まともな常識のある人と話せて良かった」と最後に言った言葉が印象的な相談でした。この相談からはいじめの芽も感じます。若い母親世代がすでに人と手を結びあうことより、人を競争相手として振りはらうことを身につけてきてしまったのでしょうか。

社宅での母親の人間関係の悩み、幼稚園の送迎バスの集合場所での母親同士のつきあいのむずかしさ、マンションで階下の人から子どもの足音や声がうるさいとの苦情を訴えられたとの相談。子どもを育てている母親をとりまく社会状況の厳しさも数多く寄せられます。そんな母親たちのストレスが子どもとの間にトラブルを起こす前に、小さくても緩衝地帯の役割が果せることを願っています。

## 「良い母親」からの解放

乳幼児期の子どもたちのことを電話相談の中からお話してみようと思い、四年間をふりかえってみたのですが、この時期はまさに子どもそのものより子

どもをかかえた母親がサポートされる時期だということがあらためて痛感されます。

もちろん二歳を過ぎると、言葉の遅れ、吃音、チック、トイレットトレーニングのトラブル、夜泣き、恐がり、性器いじり、自己主張が強い、等母親にとって〝困ったこと〟の相談も多く寄せられます。中には「どうしてもゴミを捨てられない」「異常な程のきれい好き」と神経症様的な相談もあります。これらの相談も母親の困っている様子をていねいに聴き、混乱している気持を受けとめ、状況を整理していくと、母親の方から問題解決の方向が語られることが多いのです。乱暴、噛みつく、爪かみ、後追い、落ちつきがないと二歳三か月の男児のことを相談してきた母親も、そういえば下の子が生まれた頃からめだってきた。お兄ちゃんだからしっかりさせなきゃとついつい要求水準が高くなってしまう、外に連れて出ることも減ったし、といろいろと気づき、赤ちゃんのように甘えたい気持もあるんですね、とさっそくグズグズと電話口に近づいてきた子を抱きあげて語ってくれました。

失敗やつまずきは誰にでもあります。気づいてよかったね、教科書どおりの良い母親じゃなくてあたり前、というメッセージが子育て中の母親に届いてくれたら、今度は母親が〝良い子〟の枷から子どもを解放させてあげられると信じます。

以上電話相談を通じて〝子育て〟に関して考えてみました。皆様のまわりの若いお母さん方も似たような悩みをかかえているかしれません。子育てを母親だけの重荷にせず、まわりのおとなたち皆で健やかな成長を見守ってあげたいものです。

（神奈川県横須賀児童相談所電話相談員）